法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-05-09

葬儀の作り物とその考察 ： 沖縄県八重山地方与那国島の葬儀の事例から

古谷野，洋子

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究
(巻 / Volume)
43
(開始ページ / Start Page)
243
(終了ページ / End Page)
292
(発行年 / Year)
2016-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00012797

葬儀の作り物とその考察

―沖縄県八重山地方与那国島の葬儀の事例から―

古谷野　洋　子

はじめに

本稿は沖縄県八重山地方与那国島の現在の葬儀における作り物（以下、作り物とのみ記す）に焦点を当て、作り物の製作方法及び使用法について報告するとともに、作り物に関して若干の考察を行うものである。

沖縄県では自宅葬の頃の葬儀は主に親戚や近隣の互助組織によって行われていた。[1] 龕や天蓋、四流旗などの葬具は集落で保存されているものを使用したが、造花、前卓、位牌、笠、杖、灯篭（あるいは提灯）、行燈、弔旗などの作り物は葬儀の前日あるいは当日に親族や近隣の人々によって製作された。これらの作り物の多くは実用性はなく儀礼的なものであり、[2] 祭壇や墓前を飾り、野辺の送りの葬

列をはなやかに演出した。墓前での祭祀の後は置き去りにされ、後日決まった場所で焼却されるか、決まった場所に廃棄された。このように作り物は葬儀に際してのみ製作され、原則として作り置きはされない。一回性のものであり、使用後の処理の方法も廃棄場所も決まっていた。なぜならば作り物は単なるモノではないからである。

前述した作り物は本土でもみられる一般的な葬儀の作り物であり、[3]沖縄では主に葬儀社によって広まったと考えられる（これらの作り物を葬儀社によって広まった作り物と記す）。[4]葬儀社によって広まった作り物に対して、沖縄従来の葬送習俗で使用された作り物もある（これらの作り物を従来の作り物と記す）。従来の作り物については各市町村誌や民俗誌、名嘉真宜勝（一九八九等）などに報告されている。例えば、二本のススキを結わいてアーチ型にしたサンや、竹に木札を吊るしてぶんぶん鳴るようにしたボーミチャーである。アーチ型のサンは主に葬送の後に会葬人がくぐるが、[5]サンは生と死の境界を意味したのであろう。ボーミチャーは葬式の夜のムヌウーイという悪魔追いの儀礼に使用された。これらの事例からも作り物は単なるモノではなく人々の死生観などとかかわっていることがわかる。

葬具についてまとまった論考を著わしたのは五来重である。五来は、「葬具は古来の葬送儀礼に由来すると考えられる」と述べ、「葬具は古代的葬墓をささえた宗教観念からうまれたもので、もっとも早く意味が不明に帰し、ただ装飾として残留したのである。しかしこのなかに、葬墓儀礼の原点を

さぐることができるとおもう」[五来　二〇一三　一六五]と記している。作り物も葬具の一環であるため、前述の五来の記述は葬具という言葉を作り物と置き換えることもできよう。五来のいう古代的葬墓をささえた宗教観念及び葬墓儀礼の原点とは人々の死生観などに結びつくと考えられる。葬具はもっとも早く意味が不明に帰し、ただ装飾として残留したものであると五来は述べているが、ただ装飾として残留したわけではあるまい。装飾とみなされる作り物にも役割があるはずである。

葬具及び作り物に関する研究としては、山田慎也の葬儀祭壇の研究がある[山田　二〇〇一a　二〇〇一b]。山田は葬儀祭壇という葬具（葬儀祭壇は作り物ともいえよう）から死者に対する人々の接し方の変化を読みとっているが、葬具や作り物は死者に対する人々の接し方とつながっていて、葬儀の内容を象徴するモノでもある。なお、水谷類は、木竹類や紙類、土製などの作り物や食物、あるいは儀礼的作り物と施設が、かつての葬送儀礼の場や墓造立の際には大量に用いられていて大きな役割を担っていた可能性があると述べている[水谷　二〇一〇　二〇]。

以上を纏めると、本稿で扱う作り物とは葬送儀礼の場で使用される儀礼的作り物の事であり、それは人々の死生観などと結びついていて、死者に対する人々の接し方とも関連していて、葬儀の内容を象徴し、大きな役割を担っていた可能性があるといえよう。本稿における葬送儀礼の場とは、喪家、野辺の送りの葬列、墓地とする。料理などは実用的な面もあるので本稿における作り物の範疇には含まない。

沖縄県には檀家制度もなく庶民の仏教の受容の歴史も浅いといわれる。琉球国時代には主に寺院は沖縄本島の首里に集中し、先島と呼ばれる宮古・八重山地方にはそれぞれ一寺院があるにすぎなかった。士族階級は龕を用い僧侶を招き仏教式の葬儀を行っていたが、離島の島々では士族や裕福な百姓を除いては葬儀に僧侶が招かれることはほとんどなかった。主に身内の年寄りや霊的職能者などが中心になって死者を送ったのである。与那国島では龕や天蓋、四流旗を用い、造花などの作り物が作られるようになったのは一九〇〇年頃からであるという［池間　一九七二　三二］。しかし、現在では沖縄県でも葬儀社を利用することが多くなり、火葬場も増え、葬儀のやり方は大きく変化した。自宅葬も少なくなり、喪家で作り物が準備されることもめったにみられなくなった。だが、本稿で扱う与那国島では今でも自分たちで作り物を製作し、龕による葬送を行っている。[6] 同島の葬儀は僧侶ではなく島の霊的職能者によって執り行われているが、作り物に書かれる文言などには仏教の要素がみられる。さらに、従来の作り物や霊的職能者によって製作される作り物もある。本稿ではこれらの作り物について報告し、葬儀における作り物の役割について考え、作り物とその役割からシマの死生観、及び死者に対する人々の接し方と葬儀に対する考え方の変化を考察する。

沖縄の人々は自分たちの集落をシマと呼ぶ。シマという言葉には、自らの集落をひとつの閉じた体系と見なした観念が背景にはある。シマの死生観とはシマをひとつの閉じた体系，すなわち小宇宙としてみたてた死生観である。現在では諸々の理由でシマの死生観はなりたたなくなってきているが、

かつてはそれぞれの集落がシマの死生観を持っていたものと考えられる。

本稿では葬式、葬送、葬儀は基本的には葬儀と記すが文脈によっては使い分ける。葬儀屋、葬儀会社、葬儀社は葬儀社、仏名、偈、禅語などは仏語と基本的には統一して記す。引用等の場合は統一しない。

一・与那国島の葬送の概要

ここでは与那国島の葬送の概要を述べ、さらに、死者を送る霊的職能者であるムヌチと、同島に長年保管されてきた葬儀に関する記録「葬儀書式」について紹介する。なお、与那国島の葬送については、池間栄三（一九七二等　一九五七初版）、伊藤良吉（一九七三・二〇一〇等）、喜舎場永珣（一九七七）、植松明石（一九八〇）、植松明石・大沼美知子（一九八〇）、渡辺欣雄・杉島敬志（一九八〇）、赤田光男（一九八三）、原　知章（二〇〇〇）、酒井正子（二〇〇五）、米城　恵（二〇一〇a・二〇〇一b）、古谷野洋子（二〇一三）などの論著がある。

（1）与那国島の葬送の概要

日本最西端にある与那国島は面積約二九平方キロメートル、人口約一七〇〇人の島であり、祖納、

比川、久部良の三集落からなる。八重山地方の中心となる石垣島から最も離れた島であり石垣島の葬儀社で葬儀を行うことは難しい。そのため、葬儀は島内で親族、友人、近隣の人々によって行われてきた。島外での火葬が多くなった今でも、遺骨が島に帰ると葬儀が島の人々によって行われる。ここでは同島の葬送の概要について、筆者がお聞きした同島の死にまつわる伝承と死生観と共に述べる。[7]

同島では島外（主に那覇の病院）で亡くなるのをタビで亡くなるといい、タビで亡くなるとその地で火葬され葬儀社で葬式をする。しかし、自分の家で葬式をしてあの世に送られてこそ成仏するといわれているので、タビで亡くなった死者は島に帰って家で再び葬式をしてから龕で墓地に送られる（**写真1**）。

戻ってこなければならないのは遺骨だけではない。死者のマブイ（魂）もまた遺骨と共に戻ってこなけ

写真1　龕による葬送

ればならない。人は生まれ年（十二支）の神に前方から、クサティの神に背後から守られて生きているといわれ、これらの守り神がなくなると人は死に、マブイだけが存在しつづけると考えられている。そのため島外で亡くなると遺骨と共にマブイも帰島させなければならない。死者のマブイも島に戻り、家から送られなければ死者はあの世にいけないと考えられているからである。[8] そのために人々はマブイの飛行機代として飛行機の座席あるいは空港の隅にこっそりと三〇円を落としてくる。

遺骨の帰った日が通夜となり遠方の親戚もその日に集まってくる。葬儀の準備は通夜の前日から始まる。同島の葬儀の手伝いは地域の班が基本となる。手伝いは、造花や旗などを作る作り物のグループと、料理作りのグループに大きく分けられる。料理は喪家の人々や葬儀の手伝いの人々の食事と野辺の送りの際に会葬者に出すものである。ソバや豚の三枚肉と昆布の煮物などが大鍋を使用して大量に作られる。これらの手伝いの人々の名前は担当者によってノートに記録される。このような手伝いの人々がいるからこそ今でも盛大に葬儀を行うことができるのである。

同島では今でも通夜や出棺の際には哭き歌が歌われる。ムヌチの〇氏によると、哭き歌はあの世への知らせの役割をするという。哭き歌を聞いて知らせを受けたあの世の両親や先祖たちはあの世の桟橋まで出迎え、舟でやって来た死者の手をひっぱって迎えてくれるのだという。死者はあの世の両親や先祖に快く迎えてもらうことが大事であり、あの世の人々も死者を迎えるために力を貸してくれると考えられているのである。これは葬儀の際のムヌチの願いの言葉からもうかがえる。

通夜の翌日に告別式が行われる。出棺の際にはムヌチも家族も「道を迷わずまっすぐ行くんだよ」と死者に声をかける。「まっすぐ行くように」という言葉は墓地でもかけられる。野辺の送りでは人々は旗や造花などの作り物を持ち墓地まで葬列を組んで進む。墓地で遺骨を墓室内に入れ、墓の口に造花や位牌などを飾り祭壇を作った後ムヌチの願いが行われる。ムヌチの願いの後、そこにいる会葬者全員に豚肉と昆布の煮物を紙に包んだものが配られる。墓地は各集落のはずれにあり、同島ではあの世も墓地もグズと呼ばれる。祖納の広大な浦野墓地には〝グズの銀座通り〟と呼ばれる道があるという。

あの世の神はグズガナシ、アミダノホトケなどと呼ばれ、死者は舟で川を渡ってあの世に向かうといわれている。伊藤によると、同島の比川では人間は集落と耕地に、死者は原野に、神はその周辺の山海、天地に帰属していて、人間の住む世界をサンカ、死者の世界（あの世）をヌンカといったという。ヌンカという言葉はグズという言葉以前のあの世をさす言葉であるという［伊藤　二〇一〇　二五七～二五八］。なお、比川ではヌンカとサンカの境は集落のはずれのカネジマ橋であり、ヌンカは集落の周辺のきわめて近い場所に観念されているという［植松　一九八〇　一〇六］。

納骨後、一週間ごとの法事が行われるが、特にサガイと四九日は盛大に行われる。サガイはミナンカ（二一日）までに日を選んで行われる。この日は死者をあの世の帳簿（あの世の戸籍であるという）に載せる日であり、焼香の始まりであるといわれる。墓の前で長老やムヌチが畑の絵を書き、「あの世に行っても畑を作って食べなさい。こっちの畑はあなたのもの、こっちは生きている人のもの」と

いって儀礼的に畑を分ける。死者はあの世でその畑を耕し税金を払って食べていくと考えられている。そのためサガイや四九日には仕事着を墓で焼いて死者に持たせることもある。死んだ人はあの世でも家族たちと一緒にこの世と同じような暮らしをしていると考えられているのであろう。

さらに四九日までの間に死者のマブイと遺族との別れ（チィバガシ）が行われる。なぜなら人は死んでもマブイは残っているからだ。この別れではまずムヌチが死者の言葉を遺族に伝え、次に遺族がこれからも死者の供養をするからと死者に言い聞かせ、最後にムヌチが遺族に苧麻で作った輪を首や手にかけさせ別れをさせる。四九日は真夜中の焼香といわれ、前日に墓に行って墓の土地神などに紙銭を捧げ四九日を行う旨を報告する。翌日は葬式の時と同じように多くの手伝いの人々によって盛大に料理が作られる。なお、この日から死者の位牌は仏壇に載せられる。

年忌は焼香、クブンと呼ばれ、サガイ・四九日・百日・一年半・三年・七年・一三年・二五年・三三年と九回行われる。人間は生まれてから九回の生年祝いがあるのに対して、[9]グズに旅立った死者には九回の焼香があり、九回の焼香を経た後に神になるといわれるという［米城　二〇一〇b　五五五］。ムヌチの死者に対する言葉にも「祟ることなく神になってください」という言葉があるが、筆者がムヌチのO氏からお聞きしたところによると「死んだ人は神ではなくグズの会計であるブースゥの家来になる」という。渡辺・杉島によると、祖先は最終年忌後は、「ブースゥのシンカとなる」「ブースゥの後輩となる」「アミダヌフトゥギのシンカとなる」「神となる」といわれているが、「神となる」は最終

年忌前と後の祖先の変化を隠喩的に表現しているだけであるという［渡辺・杉島　一九八〇　三五］。以上の事から、与那国島では墓に送られた死者や三三回忌を過ぎた死者は「神になる」とも表現されるが必ずしも神になるとは考えられていないようである。

（2）死者を送る霊的職能者ムヌチ

与那国島では現在でも特別な理由がない限り葬儀に僧侶が関与することはほとんどない。葬儀は死者を送る霊的職能者であるムヌチに依頼する。現在同島にはO氏（一九三一年生まれ）、M氏（一九四八年生まれ）、Y氏（五〇代）という三人のムヌチがいてお互いに都合をつけあって葬儀を担当している。

ムヌチの役割をいくつか紹介しよう。[10] 遺骨が帰る日にはムヌチは仏壇の前で先祖に「〇〇が飛行機に乗って家に帰ってきます」と報告する。このような報告を「案内する」という。ムヌチが新しい死者の到着を事前に報告するのは、あの世の両親や先祖たちにも死者を迎える準備をしてもらうためだという。遺骨が帰るとムヌチは線香をあげながら死者に亡くなった理由を述べ、「連れて帰りましたから、おうちの中で時間が来るまでゆっくりしてください」といって死者を慰労する。葬式の日の朝の引き潮の時に墓の口を開けるが、[11] ムヌチは「〇〇が亡くなったので墓に入れるから起きてください」と三回言って喪家の墓の土地神を起こす。突然死者を連れて行っては失礼であり、それなりの礼を尽くして快く死者を迎えてもらうためだという。出棺の前には死者が思い残すことがないようにムヌチ

は死者の最後の思いを周りの人々に伝える。さらに、亡くなった人の力を残った人々に与えてくれるようにと願う。墓地に着くと、墓地の神々と先祖に死者の死因を述べ、死者を暖かく迎えてくれるようにと願う。骨壺やあの世への土産を墓の中に入れた後、「墓に納めたから安心して成仏してください。あの世には父も母も先祖様もいらっしゃるからゆっくりしていろんな話をしてください。あなたはもうあの世の人になったのだから、焼香しますから成仏して極楽に行ってください」と声をかける。そして最後に、「あれが不足、これが不足といって祟ることなく神になってください」といって儀礼を締めくくる。なお、これらのムヌチの言葉は主に与那国島の方言で語られる。

このように人々やムヌチは死者があの世にまっすぐ行けるように、またあの世で快く迎えられるようにと何度も願う。それは怨みを残して死んだ人はあの世に行けず悪霊（あの世のコジキなどと呼ばれる）となり、生きている人々に祟ると考えられているからである。怨みを残して死んだ人とは、島外で亡くなった人、事故でなくなった人、若くして亡くなった人などである。この世に怨みを残さず、墓地の神々やあの世の神、亡くなった両親や先祖たちに快く迎えられてこそ死者はまっすぐにあの世に行くことができると考えられているのである。なお、死者はさまざまな形で生者に死者の〝しらせ〟を送る。[12] その仲介役をするのはムヌチであり、死者はムヌチを通じて死後も生者と交流し続ける。

以上の事例からムヌチの役割を大きくまとめると、ムヌチの役割とは墓地の神・あの世の神・あの世の両親と先祖・遺族などと死者との仲介、死者の慰撫と死者への言い聞かせ、死者の思いを遺族に

伝えるなどである。同島の葬儀は死者・遺族・あの世の両親と先祖・墓地やあの世の神々との間のコミュニケーションからなる。そのため与那国島の言葉で語られなければ意味がない。しかし、僧侶の読経はそのようなコミュニケーションからなるものではないし、与那国島の方言で語られるのでもない。また、ムヌチの行為や願いの背景には島の人々と共有している死生観があるが僧侶はこのような死生観を共有することはない。これらの理由もあって人々は今でも僧侶ではなくムヌチに葬儀を依頼している。[13]

そして、ムヌチは葬儀に際して作り物も準備する。

(3) 与那国島の葬儀の記録「葬儀書式」

同島の祖納集落には葬儀の際の作り物の文言などを記録した「葬儀書式」という半紙を綴じた記録が伝えられている。墨による汚れや破損のため「葬儀書式」は何回か書換えられてきた。「平成八年七月二十日　葬儀書式　贈　入福浜賢」と墨書された表紙はあるが(写真2)、内容を見ると少なくても三冊の「葬儀書式」の一部がまとめて保管されてきたようである。そのため、重複部分が多く、その正確な順番もわからない。紙の破損も激

写真2 「葬儀書式」の表紙

しい。本稿では重複部分をひとつにまとめ、重複部分に書かれた文字が異なる場合は該当文字に傍線を引き、異なる文字を［　］の中に記した。また、後になって明らかに文字が訂正されている場合がみられたが、この場合には訂正すべき該当文字を四角く囲み、脇に訂正文字を書き加えた。①から⑬の番号は便宜上筆者が付けたものである。なお、⑤は、左右と中央部分に分けて記されていたが、全体がわかりやすいように筆者が全体図（**図1**）を製作して掲載した。⑫の葬送順も見やすいように多少の手直しをした。（　）内は理解しやすいように筆者が加えたものである。

表紙　平成八年七月二十日　葬儀書式　贈　入福浜賢

表紙裏　注意

一．この書式使用后は必ず箱に納めること

一．書式紛失や汚損の場合は書き換えること

一．記録は末尾に記載すること

① 種子物袋　月落　天　不離　爪入袋　水流　元　入海

② 天蓋ノ四角　一．迷故三角城　二．悟故十万空　三．本来無東西　四．何処有南北

③ 合竜（龕）四ツ角　南無阿彌陀佛

④ 霊位（霊位、位牌のこと）　表　帰（歸）元男女　名　霊位　　裏　死亡年月日　享年　　才

⑤ 顔ヲ覆ノ布文字（図1）

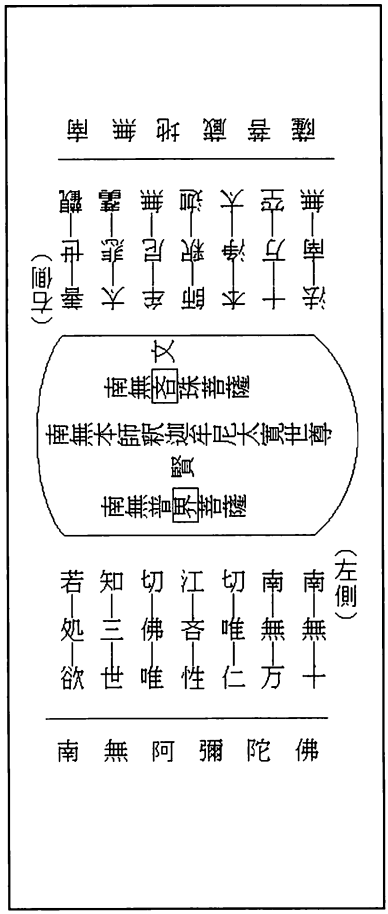


図1　顔ヲ覆ノ布文字

⑥ 四ツ旗　　諸佛請行無常　法是生滅法　僧生滅滅［々］己　寶寂滅為楽

⑦ 墓地旗　　釈迦如来楞伽仙　為衆告命南天竺　憶念彌陀佛本願　自然即時入必定

⑧ 弔文　　謹弔　哀惜　追悼　追別　弔意　安臥　痛嘆　追弔　悲哀　冥福　追悔　惜別
追念　哀愍　追福　安眠　追思　追善　哀哭　追憶　哀憐　追想　弔慰

⑨ 弔旗記載文例　謹弔　御父上様之霊　哀悼　御尊父様之霊　哀惜　御母上様之霊
追弔　御祖母様之霊　追別　御姉上様之霊　御叔父上様之霊

⑩ 弔意　何某之霊　別詞　別辞　氏名　注意　墓地旗には生存者氏名は避けてください。
一九七〇年二月二十一日、「与那覇ナサ」葬儀の際、外間守二氏考案す。

⑪ 記録（昭和二〇年から平成一三年までの四ツ旗などの寄贈の記録）

⑫ 葬送順

燈竜旗―四ツ旗　墓地旗―生花　造花　男近親者
弔旗　前卓―位牌―哀主
燈竜旗―四ツ旗　墓地旗―生花　造花　女近親者

名旗―天蓋―下駄―合竜女近親者　―男会葬人―草履―女会葬人
―水瓶―合竜の用具入箱
―男会葬人―傘―女会葬人

なお、文中の弔旗とは友人や親戚、家族などが贈る葬儀会場の供花（花輪や生花）と同じ意味であ

るという。千円を払い、葬式当日に「謹弔　御父上様之霊」「哀悼　御尊父様之霊」などと書いてもらい依頼者の名前を付け、野辺の送りの際に墓地まで運ぶ。燈篭旗とは作り物の提灯を長い竹の先に付けたものである。墓地旗は墓地の四隅に立てられる四本の旗である。以上の記録を見ただけでは同島の葬儀は仏教式の要素の濃厚な葬儀であり、葬儀社の影響もみられるといえよう。

二．作り物の実際

筆者の調査した八重山地方の島々の事例では、[14] 葬儀社で行われるようになる前は葬儀は親戚や近所の人々によって準備されるか、あるいは集落挙げての葬式が行われ、さまざまな作り物が作られていた。棺桶、位牌などは大工、あるいは心得のある人が担当し、造花や笠、提灯などは、老人、あるいは特別の役職の人、[15] あるいは器用な人が中心になって作った。ここでは、筆者の拝見した与那国島祖納のM家の葬儀（二〇一二年）の作り物について、作り方と使用法などについて報告する。

（1）作り物を作る時・場所・担当者（班）

作り物の製作は基本的には通夜の日の午前八時頃から始まる。造花作りなどの作業はハナ作りと総称されるが、旗作りの作業にははっきりした呼び名はない。前者の方がより熟練した技術が必要とさ

れるからであろうか。本稿ではハナ作りのグループをハナ作り班、旗作りのグループを旗作り班と便宜上記すことにする。旗作り班は男性のみであるが、ハナ作り班には手伝いとして女性も一名みられた。ハナ作り班の作業は喪家の前庭にテントをたて大きな作業台を置いて行われるが（写真3）、旗作り班の作業は喪家の門の外の路上で行われる。

ハナ作り班では造花、袋、笠、杖、提灯、位牌などを作る。[16] 購入した下駄・蝙蝠傘などにも金紙を張って飾りつける。葬式当日の昼までにはこれらの作業をすべて終わらせなければならない。すべての作業が終わると、三枚肉・昆布・お神酒・塩をいただき浄めの儀式をする。このような浄めをやるのはハナ作り班だけである。ハナ作り班の担当者は作り

写真3　ハナ作り班の作業

提灯（左手前・右奥）と笠（中央）を作っている。奥の箱の中に完成した造花が入っている。

物に熟練した人々であり、何人かの人がそれを手伝う。現在の担当者は仲里正明氏（一九四一年生まれ）と崎原孫吉氏（一九四二年生まれ）である。葬式の日程は前々からわかっているわけではない。そのため、二人で都合をつけあって担当している。文字を書くのは入仲誠三氏であり、筆の入った道具箱と文字をメモした紙を持参する。[17] なお、ムヌチによって用意される作り物もある。

(2) 作り物の製作方法

作り物を、A. ハナ作り班の作り物、B. 旗作り班の作り物、C. ムヌチの作り物にわけて、それらの作り方について述べる。作り物の材料は、紙や植物（葉、茎、蔓等）、ベニヤ板などである。白色の紙は主にコピー用紙を用い、金紙と銀紙はハナ作りの担当者が石垣市の書店（文具店も兼ねている）から購入して常時備えている。竹や蔓は山から採取してくる。前卓や位牌を作るベニヤ板は担当者が調達する。製作に際しては糊、セロテープ、鋏、カッター、ハンカチ、筆、ボールペンなどが使用される。作り物に書かれる文言は「葬儀書式」に拠る。ここでは作り物の製作方法とそれぞれに対応する写真を挙げる。作り物のサイズは厳密には決まっていず、製作者の長年の勘にもよる。完成したハナ作り班の作り物は主に喪家の廊下や庭の隅などにまとめて置かれる。旗は門の外にまとめて立てかけられる。

A. ハナ作り班の作り物

造花（写真4　写真5）[18]

最も手間と時間がかかるのが造花作りである。造花は白蓮、金蓮、銀蓮の三種類からなる。[19] 製作方法は同じであり、花冠（花）のみのもの、葉のみのものにわかれる。花冠は直径一二センチの正方形の紙を細工したものである（資料：「蓮の花冠の作り方」参照）。四角い箱（九センチ四方）を作りその中に輪切りにした芭蕉の茎を入れ、そこに完成した造花を挿す。箱の底から測ると造花は全長約三〇センチである。九本ごとに箱に挿したものが二つで一組となる。各色ともに五組など奇数で製作される。なお、焼香台や前卓に置かれる白蓮はやや小ぶりで花数は一〇本、容器も円錐形である。

キバナ（写真6）

赤や黄色の葉をつけたクロトンの茎を芭蕉の茎の入った箱に活け、上には細長く切った障子紙を飾る。蓮の造花よりも多少大きめであり、二組作る。以前はクロトンではなくクロキやガジュマロを使用した。

種子物袋・爪入袋（写真7）

種子物袋は穀物の種子を、爪入袋は死者の爪を入れるものであり、それぞれ一つずつ製作される。金紙で台形（横最大一八センチ、縦一二センチほど）の袋を二つ作り、表に仏語を書いた白い紙（B4のコピー用紙を四等分したものであり、文言は「葬儀書式」参照）を貼り付ける。死者の爪は火葬

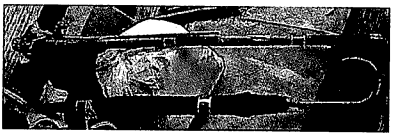


写真8　杖（下の蝙蝠傘と同じ長さ）

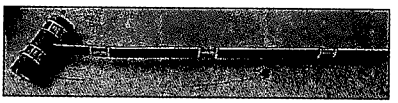


写真9　柄杓

写真11　行燈

写真10　笠

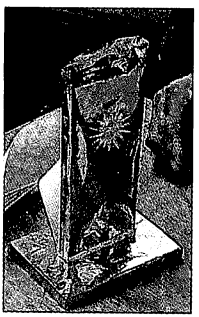


写真13
金紙を貼った位牌

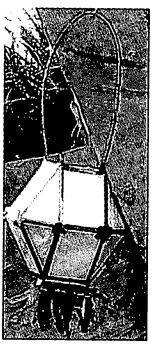


写真12　提灯

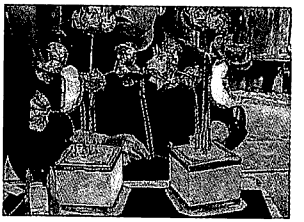


写真4　金蓮の造花

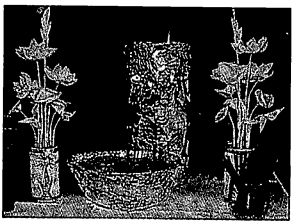


写真5　焼香台の白蓮の造花

写真6　キバナ

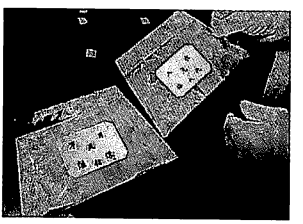


写真7　種子物袋と爪入袋

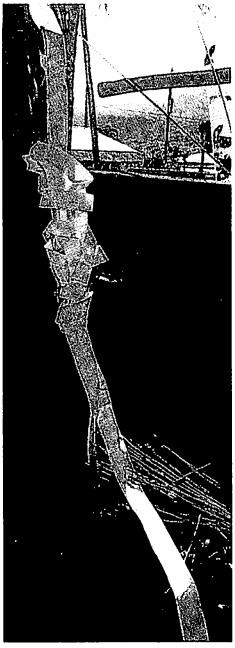


写真17　天蓋の組紐

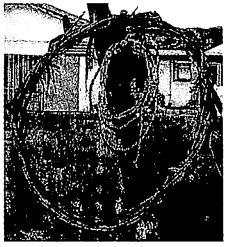


写真15　イットウの輪

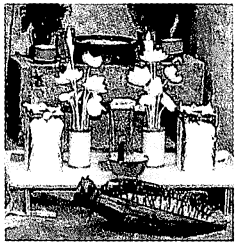


写真14
墓の口の前に置かれた
前卓とクバの葉の香炉

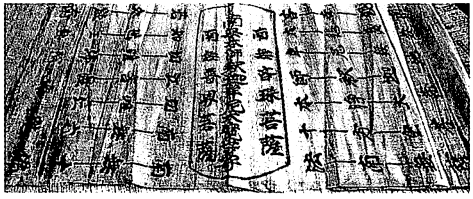
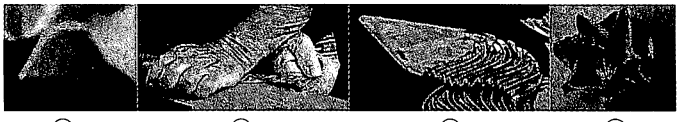


写真16　“顔を覆う布”



①　②　③　④

（資料：蓮の花冠の作り方）　二等辺三角形に折った上部を緩いカーブをつけて台形状に切る（①）。①を布で包み、端を手の付け根で固定し片方の手で力を入れて布を捻じり（②）、花冠に皺を付ける（③）。③を開き3枚重ね合わせて完成（④）。

前に切って保存しておいたものを入れる。種子は大豆などを芽が出ないようにフライパンで炒めて入れる。[20]

杖（写真8）　柄杓（写真9）　笠（写真10）　行燈（写真11）[21]　**提灯（写真12）　位牌（写真13）　前卓（写真14）　骨箱**（写真なし）

提灯、行燈、位牌が一対、ほかはすべて一つずつ作られる。前卓、位牌を除きこれらの作り物に実用性はないので小ぶりに製作される。杖は竹の皮を削り白い紙と金紙を巻き、頭頂部には金紙を麻ひもで巻きつける。杖の長さは蝙蝠傘とほぼ同じ長さであり、葬列の時には柄杓を括り付け笠を垂らす。柄杓は竹で柄の部分（全長約三〇センチ）と杓の部分（全長約五センチ）を作って組み立て、やはり飾りの白い紙と金紙を巻きつける。笠はタケヒゴで円錐形の型（直径約二〇センチ、高さ約一〇センチ）を作り（**写真3参照**）、白い紙で頂を覆い金紙と銀紙で飾り付ける。行燈は同じ大きさの箱（高さ約二〇センチ、幅約一五センチ）をふたつ作り白紙を張り飾りに金紙と銀紙を貼る。提灯はタケヒゴで多角形の骨組（高さ約四〇センチ、最大横幅約三〇センチ　**写真3参照**）を作り、全体に白い紙を張り金紙で飾りを入れる。[22] タケヒゴで持ち手を作り、長い竹の先に吊るして墓地まで運ぶ。位牌はベニヤ板に白紙を貼って二つ作り（高さ約一五センチ、横約六センチ）、筆で表と裏に文言を書き台を付ける。位牌のうち一つは金紙で包み銀紙の飾りを貼る（この位牌は墓地まで運ばれる）。前卓（長さ七〇センチ、幅三〇センチ、高さ九センチ）は、位牌、白蓮の造花、行燈などを載せる小さなお膳で

ありベニヤ板で作る。骨箱は遺骨を入れる箱であり、やはりベニヤ板で作る。

イットウの輪（写真15）

イットウの輪とはトウツルモドキ（方言名イットウ）の蔓で作られた直径約一メートルの丸い輪である。[23] 人々は素材の名称にちなんでイットウとのみ呼んでいた。正式名称が不明なのであろう。

〝顔を覆う布〟（写真16）

〝顔を覆う布〟はかつては六尺（二二八センチ）の芭蕉布あるいは麻布であったというが、現在ではそれほど長くない（長さ約一二〇センチ、幅約五〇センチ程度）。最初に布の中央部分に仏名を書き、それから両脇の文字を書き、両脇の文字を線でつなぐ（文言は「葬儀書式」参照）。

天蓋の組紐（写真17）

天蓋旗は先端の龍頭と天蓋と持ち手の部分からなる。天蓋の下には黒い布が袋状に取り付けられ、その袋状の布の内側から全長一メートル以上の組紐が垂らされる。組紐は白い細長い紙（長さ二メートル以上、幅約一〇センチ）を作り、横に折り紙幅を約五センチにして、紐の上部を複雑に結んだものである。組紐の上部（長さ約六〇センチ、最大横幅約二〇センチ）は女性の腹部を表わしているという（**図2**）。

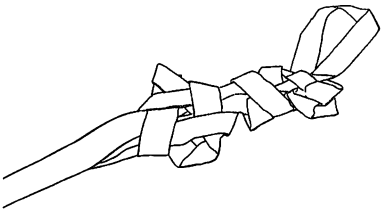


図2　天蓋の組紐の上部の結び方
（女性の腹部を表わすという）

B．旗作り班の作り物（写真18）

竹を洗い節や葉をとり、墨書した布を付けて、墓地旗（四本）、名記（一本）、弔旗（希望者の数に応じて製作される）を作る。墓地旗と弔旗の文言は「葬儀書式」に記されている。名記には故人の名前を書く。旗の長さによって棹の長さは異なる。墓地旗が最も大きい。

写真18　墓地旗

C．ムヌチの作り物（写真14）

ムヌチは通夜の前日からウチカビと御願用白紙を五枚ずつ合わせたセットを三三回忌がすんでない先祖の数だけ準備した。[24] ウチカビは先祖に御願用白紙は墓地の神々やあの世の神々に捧げるものである。出棺の日に墓の口を開けるが、これを墓の口開けという。この日は墓地でクバの葉の香炉を作る。クバの葉の香炉はクバの葉の先を結わき容器とし、中に砂を入れたものである。

(3) 作り物の使用法とその処分

完成した作り物は、喪家、野辺の送りの葬列、墓地で使用される。以下、葬儀の流れと共に作り物の使用法とその処分について述べる。

喪家にて

イットウの輪は遺骨が島外から家に帰って来たとき喪家の門のところで使用される。二人の男性がイットウの輪の両側を持ち、遺骨を持った喪主を三回くぐらせる（**写真19**）。家に帰った遺骨は仮祭壇（焼香台）の前に置かれるが、そのとき〝顔を覆う布〟を骨壺の上から掛ける。この布は最終的には骨壺と共に墓の中に入れられるという。白蓮の造花一対は通夜の日から出棺まで喪家で焼香のための仮祭壇の上に置かれ、後に墓地まで運ばれる。種子物袋と爪入袋は火葬になる前は死者と共に棺に入れたというが、現在では骨箱の中に入れられたのであろう。イットウの輪の処分法については調査していない。

写真19　イットウをくぐる遺骨を持つ喪主

野辺の送りの葬列

告別式が終わると遺骨を載せた龕とともに作り物が墓地まで運ばれる。天蓋旗（**写真20**）は婿、前卓は喪主、造花は孫など、何を誰が運ぶかは故人との関係で決まっているようである。前卓の上には一対の行燈と白蓮の造花、金色の位牌を載せる。天蓋旗は墓地に着くとすぐに分解されて片付けられる。天蓋の組紐も同時に処分されたと考えられる。

墓地にて

墓地の中にはクバの葉の香炉が墓地の地の神、屋根の神、タチ神、門の神、子の神などの居場所（合計九か所）に置かれている。墓地には既に供物の入った重箱、祈願の際の敷物、生花などがトラックで運ばれている。葬列が到着すると墓地の四隅に墓地旗を立て、さらに弔旗や名旗を周囲に立てる。龕とともに運んできた作り物を墓地内に入れ、墓の左右には灯篭を吊り下げ、墓の正面には金蓮、銀蓮、キバナの作り物を置く。杖や笠は墓の右側の袖に置かれる。墓の庭の両脇にはユリや菊などの生

写真20　天蓋旗を運ぶ

花が並べられる。

遺骨を墓室の中に入れた後、墓の口を閉め、墓の口の壇に生花の花立てと茶碗の線香立てを置く。墓の口の前には位牌、行燈、白蓮の造花、香炉が載った前卓を置き、その前にさらにクバの葉の香炉を置く。ここは墓での願いの際の祭壇となる。祭壇の正面に敷物を敷き供物の重箱（豚の三枚肉の醤油煮、昆布、白餅などが入っている）を並べ（**写真21**）、ムヌチと家族が敷物の上に並んで願いをする。願いのあとムヌチの用意した紙銭のセットを燃やし、遺族の代表の挨拶で葬儀は終わる。運ばれてきた作り物は墓に置かれたままでサガイ、あるいは四九日にまとめて燃やされる。

写真21　墓の口に祭壇をつくるムヌチ

三、作り物の役割に関する考察

ここでは同島の作り物をその特徴や製作者から、仏教的な要素を持つ作り物又は仏教式の葬具に取り付けられる作り物、葬儀社によって広まった作り物、従来からの作り物、霊的職能者の作り物、そ

の他に分けて作り物の役割について考えたい。

（1）仏教的な要素を持つ作り物、又は仏教式の葬具に取り付けられる作り物

本稿における仏教的な要素を持つ作り物とは仏語の書かれる作り物であり、〝顔を覆う布〟、墓地旗、種子物袋と爪入袋である。

〝顔を覆う布〟は経巾とも呼ばれ、琉球国時代には貧しくて葬儀に際して僧侶を呼べない人々が僧侶の読経のかわりに求めたものである。[25] 与那国島ではチラヌサァディと呼ばれていて、かつては布の中央部分を遺体の顔に当てて覆ったというが、火葬となった現在では骨箱の上に掛ける。同島では「与那国にはお坊さんがいないからお経のかわりにやっている」といわれ、「よそにもどこにもいかんでまっすぐグズまで行きなさい」という意味があるという［原　二〇〇〇　一一五］。しかし、筆者がお聞きしたのは「一種の魔除けさ」ということであった。[26] 〝顔を覆う布〟には仏語が書かれ、その一部の文字は線で繋がれるなど複雑な書き様を呈している。これらの仏語とその書き様に人々は魔除けの意味を与えたのであろう。葬儀の際に死者の周囲には悪いものが群がってくるとムヌチの〇氏はいうが、同島の葬儀ではさまざまな作り物が魔除けの役割をはたしていると考えられている。

四流旗と墓地旗にも仏語が書かれる。[27] 四流旗は現在では保存しているのを使用しているため本稿の作り物の範疇には入れず、ここでは墓地旗について考えたい。四本の墓地旗は他の旗よりも大きく製作

される。葬列では他の旗よりも後方に位置し、生花や造花、喪主の前に運ばれる。しかし、墓に到着すると墓地旗が最初に墓の四隅に立てられ、他の旗がその周囲をとり囲む。同島では墓地はグズ（あの世）とも呼ばれ、悪霊などがいる場所と考えられている。墓地旗は墓地の魔除けの役割を担ったものではないかと考えられる。

種子物袋と爪入袋は死者に持たせる袋であり、[28]それぞれの袋の表には仏語が書かれている。[29]種子物袋はあの世で死者が畑を耕す際に使う種子物の入れ物である。なぜ爪を入れるかについては聞けなかったが、[30]死者があの世で使う種子や死者に持たせる爪は特別のものである。袋の表に書かれた仏語は中に入っている種子や爪を清浄に保つ魔除けの役割をはたしているものと考えられる。

天蓋旗は仏教式の葬具であり、葬列でのみ使用され墓地に到着するやいなや分解されて片付けられた。赤田によると死霊はこの天蓋旗に依りついて墓に行くという［赤田　一九八三　六一］。葬列で最も大切なことは、遺体（あるいは遺骨）と共に死者のマブイを墓地あるいはあの世まで運ぶことであり、葬列でのみ使用される天蓋旗が死者のマブイを運ぶ役割であることは十分考えられることである。天蓋旗の天蓋の下には袋状の黒い布が付けられ、その袋状の黒い布の内側から組紐が垂れ下がっている。葬列では天蓋旗はその組紐を垂らしながら運ばれるが、死者のマブイは垂れ下がった組紐に依りついて運ばれると考えられる。つまり、厳密に言えば死霊が依りつくのは天蓋旗ではなくて天蓋の組紐であると考えられる。天蓋の組紐は死者のマブイを依りつかせ、墓地あるいはあの世まで運ぶ

役割と考えられる。仏教式の葬具に取り付けられる作り物もシマの死生観と結びついているといえよう。

(2) 葬儀社によって広まった作り物

前述したが、造花、杖、笠、行燈、提灯、位牌、前卓などは葬儀社によって広まった作り物といえる。[31] 現在、石垣島の葬儀社では与那国島で作られている作り物とほとんど同じ作り物（一部の造花の形は異なるが）が用意（販売）されている。

では、これらの作り物について人々はどのように考えているのだろうか。例えば本土では杖や草鞋や笠は旅支度を意味していて、死者があの世に旅立つ際に使われるものと考えられている。杖に草鞋や笠が括り付けられるのはそのためであろう。与那国島では杖に柄杓と笠を括り付けるが、これらの作り物のいわれについては柄杓を除いては聞けなかった。柄杓については次のような話を聞いた。以前は野辺の送りの時、酒の入った一斗甕を墓まで担いでいって野辺送りの客にふるまったがその時に柄杓を持って行った。現在、一斗甕は運ばず作り物の柄杓だけを墓地まで運ぶという。柄杓を除いた作り物のいわれについては知られていないようであり、これら葬儀社によって広まった作り物はシマの死生観などとはさほど関係のない作り物といえよう。

では、なぜ人々は多くの時間と労力をかけてこれらの作り物を作るのだろうか。位牌や前卓を除い

てこれらほとんどの作り物は実際に使用されるものではない。これらの作り物は儀礼的な作り物であり、そのほとんどにあざやかな金銀の飾りが施されている。金蓮銀蓮の造花にいたっては全てが金紙、或いは銀紙で製作されていてまばゆいばかりであり、熟練した技術が必要なほど精巧に作られている。造花以外の作り物では本体に白い紙を巻いてから金紙や銀紙の飾りを貼り付けているが、このような手法は金紙や銀紙の輝きを目立たせる。[32] 現在の葬儀ではあふれる程の生花が島外から宅急便で届けられるが、生花のなかった時代にはこのような作り物ははなやかに葬儀を演出したに違いない。つまり、これらの作り物は主に葬列や墓地での祭祀をはなやかに演出する役割なのである。これらの作り物で葬儀をはなやかに演出するようになった背景には、死者に対する人々の接し方と葬儀に対する考え方の変化がかかわっているものと考えられる。

(3) 従来からの作り物

イットウの輪は最近はめったに作られないという。故人の叔母のU氏（当時八八歳）によると、昔はタビで亡くなった人が帰ってきたら「こんなもの二度とないように、生まれ変わってきなさいよー」という意味で門の入口で上から下に三回輪をくぐらせたという（昔は遺体をくぐらした）。まだ若いのにタビで（那覇の病院で）亡くなった甥がかわいそうでU氏はイットゥの輪を作るように指示したという。与那国島では島外で亡くなった死者、あるいは不慮の事故や若くして亡くなった死者はそのま

までは葬儀を出してもらうこともできなければ、あの世に行くこともできない存在だと考えられていた。なぜなら正常な死に方（老衰で自宅死）をした死者ではないからである。前述したが、正常な死を迎えなかった死者はこの世に怨みを残しているので生きた人に祟ると恐れられていたのである。そのため、門前でイットウの輪をくぐり正常な死を迎えた死者に生まれ変わりはじめて喪家の中に入れたのである。イットウの輪は生と死の境界であり、異常な死を迎えた死者を正常な死を迎えた死者に生まれ変わらせる役割をしている。シマの死生観と結びついた作り物といえよう。

（4）霊的職能者の作り物

霊的職能者であるムヌチはウチカビと御願用紙のセットを作った。ウチカビはあの世のお金といわれていて漢族の祭祀習俗である紙銭に由来するものであり、沖縄の祖先祭祀において重要な役割をはたしている。墓地ではムヌチによって、あの世の神々や墓地の神々、あの世の両親や先祖にウチカビと御願用紙のセットが捧げられたが、これはあの世や墓地の神々とあの世の人々に対する贈り物である。墓地の各所に置かれるクバの葉の香炉は神事でも使用される同島の伝統的な香炉であり、邪気が入らないようにする役割である。[33]

(5) その他

前述したが、弔旗とは葬儀会場に飾られる供花に相当する。供花である花環や生花は家族や親族、友人がお金を払って死者に送るものであり、弔旗は葬儀社のこのシステムを模倣したものである。弔旗は「葬儀書式」によると一九七〇年に外間氏によって考案されたようだが、筆者は西表島の干立でも同じような話を聞いた。弔旗は他の旗と共に葬列や墓地の周囲を飾るだけでなく、葬儀の際の付き合いに一役かっているといえよう。

以上をまとめると、作り物の役割は、魔除けの役割、死者のマブイを依りつかせ墓地あるいはあの世まで運ぶ役割、葬儀をはなやかに演出する役割、あの世や墓地の神々とあの世の人々に対する贈り物としての役割、葬儀会場に飾られる供花に相当する役割であった。そして、作り物に書かれる仏語は魔除けとみなされているようであり、仏教式の葬具に取り付けられる作り物であってもシマの死生観と結びついた役割を担っていることがわかる。

四．作り物の役割からみたシマの死生観と死者に対する接し方と葬儀に対する考え方の変化

ここではいくつかの作り物とその役割からみたシマの死生観と人々の死者に対する接し方と葬儀に

対する考え方の変化について考察する。

（1）作り物からみたシマの死生観

ここではシマの死生観と結びついていると考えられるイットウの輪と天蓋の組紐からシマの死生観について考察したい。

まず最初にイットウの輪の役割についてさらに検討したい。イットウの輪は生と死の境界であり、異常な死を迎えた死者を正常な死を迎えた死者に生まれ変わらせる役割をしていた。シマの死生観と結びついた作り物といえよう。イットウの輪は生と死の境界であり、島外で死んだり、若死にしたりした死者、事故死の死者を正常な死を迎えた死者に生まれ変わらせる役割をしていた。しかし、イットウの輪をくぐったのは死んだ人ばかりではない。生きている人も輪をくぐることがあった。年配の女性たちの話では出産に際してもこのような輪くぐりが行なわれたという。日の悪い日に生まれた子供は生後二～三日目に、「また、まりきりよー」（生まれ変わりなさい）といいながら藁で作った輪に七回くぐらせた。[34] 島外で生まれた赤ん坊も輪をくぐらせたというが、これは赤ん坊が帰島してからであろう。山などで行方不明になった人が発見されて家に入る時には輪を七回くぐらしたというが、「まったまーりー」（生まれ変わりなさい）の意味だという。洗骨の際に墓の中に入る時も輪を七回くぐってから中に入ったという。イットウの輪は異常な死を迎えた死者だけでなく、さまざまな生者や死者を

生まれ変わらせることができると考えられていたようである。

ではなぜイットウの輪をくぐることは生まれ変わることと考えられたのだろうか。そのためには生と死がシマの人々にどのようにみなされているのかを知る必要がある。住谷一彦とクライナー・ヨーゼフによると、八重山諸島波照間島では「生まれる」は「マラヒャン」、「死ぬ」は「マラン」であるといわれるが、両方の言葉は同じ語源と繋がる語幹を持っているらしく、「生まれる」と「亡くなる」ということには人間のマブイがその定在形態Daseinsformを変えるという共通の意味があるといってよいと述べている［住谷・クライナー　一九七七　二六五］。前述したが、与那国島では生者には守り神が付いていて、これらの守り神がなくなるのが死であり、死ぬとマブイだけになって存在すると考えられている。つまり、同島では生とはマブイに守り神が付いた状態であり、死はその守り神がなくなった状態なのである。同島では飛行機賃を出してまで（三〇円ではあるが）遺骨と共にマブイを島に帰らせる。葬儀に際して死者のマブイもまたまっすぐあの世に行かなければならないと考えられているからである。波照間島と同じように同島でも生と死とは人間のマブイがその定在形態を変えていることだという観念があるのであろう。生と死がマブイがその定在形態を変えることならば、与那国島では生と死は繋がっていて連続しているものだという死生観の存在が指摘できよう。生と死が繋がっていて連続していると考えられているからイットウの輪をくぐることは生まれ変わることと考えられたのであろう。

生と死が連続したものであり、マブイの定在形態の変化に拠るのであれば、生と死という相反する二つのものは大もとでは一つであり、生と死は表裏一体と考えられる。[35] 同島の伝承では、死者の赴くあの世は生きている人のすぐ近くであり、死んだ人たちはあの世でもこの世と同じように暮らしているという。生と死が表裏一体のものと考えられているからこそ、あの世の人々もこの世の人々と同じように暮らしていると考えられているのであろう。

次に天蓋の組紐について考えたい。天蓋の組紐は死者のマブイを依りつかせ、墓地あるいはあの世まで運ぶ役割を担っていると考えられた。天蓋の組紐の上部は複雑に結んであり、これは女性の腹部を模しているといわれる。このように人体を模した紐の結び方は同島ではタチムンビと呼ばれる。[36] 米城は、産室の入口に吊り下げられた注連縄（シルンナ）にもタチムンビが作られたといい、シルンナのタチムンビはこの世への、天蓋のタチムンビはあの世への人の魂が乗り移る形代の趣が強いと述べ、死は新生への通過点であり、後生への誕生を意味したのだろうかという［米城　二〇一〇a　八～九］。天蓋の下の袋状の黒い布の内側には組紐の上部、つまり女性の腹部を模した部分が隠されている。葬列では死者のマブイは垂れ下がった組紐に依りつくと考えられたが、さらに袋状の黒い布の内側に隠れている組紐の女性の腹部を模した部分に依りつき、その中に入ると考えられているのではないだろうか。女性の腹部を模した複雑な組紐の部分をわざわざ作る理由はマブイがそこに入ると考えられているからであろう。女性の腹部にマブイが入ることは誕生を意味すると考えられる。[37] 米城の示唆した

ように死は新生への通過点でありあの世への誕生という死生観の存在を指摘できよう。

(2) 作り物からみた死者に対する接し方と葬儀に対する考え方の変化

前述したが那覇市に葬儀社ができたのは明治後期からであり、石垣町（現石垣市）では大正八年である［石垣市役所　一九八三　八六九］。葬儀社によって広まった作り物は比較的新しい作り物であると考えられる。これらの作り物は葬列や墓地での祭祀をはなやかに演出する役割であり、シマの死生観とは関係のない作り物といえよう。しかし、これらの作り物の受容された背景や過程を考えることによって、人々の死者に対する接し方と葬儀に対する考え方の変化が見えてくると考えられる。

かつての沖縄では士族や一部の金持ちを除いて死者を送るという行為は決してはなやかなものではなかった。[38] 死者は人々に忌避されていたのである。八重山地方の波照間島では明治三〇年代後半までは葬儀は近親のみで行われていた。明治三七年（一九〇四）一二月五日の琉球新報の「波照間通信」は同島の葬儀を次のように報じている。「死者を音なう（ママ）ものは必ずわが身の上に不幸来るものと迷信し大に之を忌避して他人は全く立ち寄らざる奇風あり」［竹富町史編集委員会　一九九四　一六五～一六六］。このような葬儀が変化したのは明治三十七年の日露戦争の戦死者の葬儀からだった。この葬儀は島庁通達により、島司、村頭の参列の下、島民挙げての参列で盛大に行われた。[39] 前述の新聞報道によると、この機会に葬儀の迷信打破を島の代表者たちを召集して説得したのでこのような弊習も一

掃されたとある。死者を忌避して葬儀に他人が立ち寄りたがらなかったのは波照間島だけではない。八重山地方の竹富島には死人の家に入るときの呪文があり、その呪文を門前で唱すれば死者の霊はその人に災いをもたらさないといわれていた［上瀬頭　一九七六　二六七］。石垣市では葬式の行列をみる子供たちにはサンを持たせた［山里　二〇〇七　一七二］。ススキや蓂、芭蕉などの片方を結んだものはサンと呼ばれ、それは悪霊を払う強い呪力を持つと信じられていたからである。以上の事からも、死者、あるいは死者の霊が災いをもたらすものとして忌避されていたことがわかる。

前述したが与那国島では、龕を用い、造花を造り、葬列が行われるようになったのは一九〇〇年頃からであるといわれる。それ以前は物持ちだけが一族協力してスガヌタという木で龕に似たものを造り葬式に使用していただけで、貧者は屍を棺に入れ、又は葦ムシロに包んで、そのまま縄をかけて担いで墓地へ運んだという［池間　一九七二　三一］。波照間島と与那国島の事例からであるが、八重山地方では一九〇〇年頃を境に、他人が全く立ち寄らなかった葬儀から多くの会葬者が葬列を組んで墓地へ向かう葬儀へと変化しはじめたことがわかる。〝忌避される葬儀〟から〝見せる葬儀〟への変化である。そしてこの変化を促した原因の一つが戦死者の葬儀に関する島庁通達であった。しかし、いくら島庁通達であっても人々の死者に対する忌避の感情が簡単になくなるわけではないであろう。石垣町では大正九年には葬儀社が造花（広告には「造花特別上等」と記されている）を用意しているが［石垣市役所　一九八七　四六］、葬列をはなやかに演出する葬儀社の作り物は死者に対する忌避の感

情を隠蔽し、人々の死者に対する接し方を変化させるのに大きな役割を担ったのではないかと考えられる。

〝忌避される葬儀〟から〝見せる葬儀〟への変化はさらに葬儀に対する考え方も変化させたと考えられる。盛大かつはなやかな葬儀をして死者を送ることが喪家の名誉であり、かつまた死者への慰めになると考えられるようになったのである。つまり、葬儀社によって広まった作り物は、人々の死者に対する接し方を変化させるとともに葬儀に対する考え方も変化させる一因となったと考えられるのである。盛大かつはなやかな葬儀をするために、都市部の金持ち以外の人々は自分たちでこれらの作り物を製作し始めた。筆者の八重山地方の葬儀に関する調査では、多くの話者が造花について言及し、その製作方法を語ってくれたが、作り物の中で最もはなやかな造花は特に葬儀になくてはならない作り物になっていたことがわかる。

まとめとして

沖縄県八重山地方与那国島では島外での火葬が多くなった今でも、遺骨が島に帰ると多くの人々の手伝いによって自宅葬が行われている。自宅葬では造花や旗などの作り物が製作され、葬列を組み龕による葬送が行われる。同島の葬儀は僧侶ではなく島の霊的職能者によって執り行われているが、作

り物に書かれる文言などには仏教の要素がみられる。さらに、霊的職能者によって製作される作り物もあれば、従来の葬送習俗で使用されていた作り物が作られることもある。本稿ではこれらの作り物について報告し、葬儀における作り物の役割について考え、作り物とその役割からシマの死生観と、死者に対する人々の接し方と葬儀に対する考え方の変化を考察した。

同島の作り物は、ハナ作り班の作り物、旗作り班の作り物、ムヌチの作り物に大きく分けられる。ハナ作り班の作り物は、造花、キバナ、種子物袋、爪入袋、杖、柄杓、笠、行燈、提灯、位牌、前卓、骨箱などであり、金紙、銀紙を用いてはなやかに作られる。位牌、前卓、骨箱を除ききこれらほとんどの作り物は儀礼的な作り物といえる。さらに、ハナ作り班では仏語を書いた〝顔を覆う布〟、天蓋の組紐、従来の作り物であるイットウの輪などが製作された。旗作り班では墓地旗、名旗、弔旗などの旗が作られる。霊的職能者であるムヌチは墓地で燃やすウチカビと御願用紙のセットと墓地に置かれるクバの葉の香炉を作った。

同島の作り物の役割とは、魔除けの役割（〝顔を覆う布〟・種子物袋と爪入袋・墓地旗・クバの葉の香炉）、死者のマブイを墓地あるいはあの世まで運ぶ役割（天蓋の組紐）、喪家の別れの場や葬列、墓前祭祀の場をはなやかに演出する役割（造花類など）、異状な死を迎えた死者を正常な死を迎えた死者に生まれ変わらせる役割（イットウの輪）、あの世の神々や墓地の神々とあの世の人々に対する贈り物の役割（ウチカビと御願用紙のセット）、葬儀会場に飾られる供花に相当する役割（弔旗）であった。

そして、作り物に書かれる仏語は魔除けの役割をはたしているとみなされているようであり、仏教式の葬具に取り付けられる作り物（天蓋の組紐）であってもシマの死生観と結びついた役割を担っている。

同島の作り物の中でシマの死生観と最も結びついていると考えられる作り物がイットウの輪と天蓋の組紐である。あの世とこの世の境界と考えられるイットウの輪と、女性の腹部を模しているといわれる天蓋の組紐からは、生と死が繋がっていて連続しているというシマの死生観と、米城の示唆したように死は新生への通過点でありあの世への誕生であるというシマの死生観が指摘できよう。そして、生と死が連続して繋がっているからこそ、同島の伝承にもあるように死んだ人はあの世でもこの世と同じように暮らしていると考えられているのであろう。

造花などは葬儀をはなやかに演出するがこれらの作り物は葬儀社によって広まった作り物であり比較的新しい作り物と考えられる。かつて死者は恐れられていて、他人が喪家を訪れることはめったになかった。死者に対する強い忌避の感情が存在していたのである。しかし、二〇世紀の初めころから八重山地方では、葬儀は〝忌避される葬儀〟から〝見せる葬儀〟へと変化しはじめた。葬儀社によって広まった作り物ははなやかであり、〝見せる葬儀〟に際して死者に対する忌避の感情を隠蔽し、人々の死者に対する接し方と葬儀に対する考え方を変化させる一因となったと考えられる。

同島でも現在では島外で亡くなることが多い。しかし、遺骨となって帰島しても、シマの人々によっ

て作り物が準備され、死者は家から龕に載せられ墓地まで運ばれる。このような葬儀はいまだにシマの死生観が共有されていることを示しているといえよう。

《謝辞》

葬儀を拝見させていただいたM家の方々に感謝の意を表すと同時に故人の御冥福をお祈りいたします。また、ハナ作りの伝承者である仲里正明氏と崎原孫吉氏には多くの事を教えていただきました。本稿にお名前を記して感謝の意を表わします。

《参考文献》

赤田光男　一九八三「与那国島の葬墓制と祖先信仰」『帝塚山短期大学紀要　人文・社会科学編』第二〇号
池間栄三　一九七二（一九五七初版）『与那国の歴史』池間苗子（ママ）
石垣市役所　一九八三『石垣市史　資料編　近代四　新聞集成1』石垣市役所
石垣市役所　一九八七『石垣市史　資料編　近代五　新聞集成2』石垣市役所
石垣市総務部市史編集室　一九九一『石垣市史叢書1　慶来慶田城由来記・富川親方八重山島諸締帳』石垣市役所
伊藤良吉　一九七三「八重山よなぐに島の葬制・墓制―調査ノートより―」『フォクロア』一八―二一号　伊勢民俗学会

伊藤良吉　二〇一〇「与那国島比川の他界伝承をめぐって」与那国町史編纂委員会事務局『町史（本巻）　第二巻　民俗編　黒潮源流が刻んだ島・どぅなん　国境の西を限る世界の、生と死の位相（トポロジー）』与那国町役場
上勢頭　亨　一九七六『竹富島誌　民話・民俗篇』法政大学出版会
植松明石　一九八〇「神霊観と民俗的世界」渡辺欣雄　植松明石編『与那国の文化――沖縄最西端与那国島における伝統文化と外来文化：周辺諸文化との比較研究』与那国研究会
植松明石・大沼美智子　一九八〇「儀礼の体系　人生儀礼」渡辺欣雄　植松明石編『与那国の文化――沖縄最西端与那国島における伝統文化と外来文化：周辺諸文化との比較研究』与那国研究会
喜舎場永珣　一九七七「八重山列島の葬礼習俗」『八重山民俗誌　上巻　民俗篇』沖縄タイムス社
古谷野洋子　二〇一二「沖縄の葬送における経巾の習俗―八重山・宮古における事例を中心に―」『沖縄文化』第四六巻二号
古谷野洋子　二〇一三「沖縄における〝死者を送る人々〟―八重山諸島与那国島の〝ムヌチ〟の事例から―」『比較民俗研究』二八号
五来　重　二〇一三（一九九二　初版）『葬と供養』（新装版）東方出版
酒井正子　二〇〇五『奄美・沖縄　哭きうたの民族誌』小学館
住谷一彦　クライナー・ヨーゼフ　一九七七「パティローマ」住谷一彦　クライナー・ヨーゼフ『南西諸島の神観念』未来社

竹富町史編集委員会　一九九四『竹富町史　第二巻　資料編　新聞集成Ⅰ』竹富町役場
竹富町史編集委員会　二〇〇九『竹富町史　第一〇巻　資料編　近代五　波照間島近代資料集』竹富町役場
名嘉真宜勝　一九八九「沖縄の葬送儀礼」渡邊欣雄編『環中国海の民俗と文化　三　祖先祭祀』凱風社
那覇市企画部市史編集室　一九七四『那覇市史　通史篇　第二巻　近代史』那覇市役所
原　知章　二〇〇〇「儀礼と社会変動―死者儀礼の持続と変容―」『民俗文化の現在　沖縄・与那国島の「民俗」へのまなざし』同成社
水谷　類　二〇一〇「不可知の墓制―葬・墓・祭りの発見―」西海賢二・水谷類・渡部圭一・朽木量ほか著『墓制・墓標研究の再構築―歴史・考古・民俗学の現場から―』岩田書院
山里純一　二〇〇七「魔除け信仰」石垣市史編集委員会『石垣市史　各論編　民俗　下』石垣市
山田慎也　二〇〇一a「死をどう位置づけるのか　葬儀祭壇の変化に関する一考察」『国立歴史民俗博物館研究報告』九一集
山田慎也　二〇〇一b「行く末よりも来し方を　生花祭壇における死者の表現」浅香勝輔教授退任記念刊行委員会編『歴史と建築のあいだ』古今書院
米城　恵　二〇一〇a「「たちむんび」でつながる生と死、死と生の連続」与那国町史編纂委員会事務局『町史（本巻）第二巻　民俗編　黒潮源流が刻んだ島・どぅなん　国境の西を限る世界の、生と死の位相（トポロジー）』与那国町役場

米城　恵　二〇一〇b「葬式から三十三年忌まで」与那国町史編纂委員会事務局『町史（本巻）　第二巻　民俗編
黒潮源流が刻んだ島・どぅなん　国境の西を限る世界の、生と死の位相（トポロジー）』与那国町役場
渡辺欣雄・杉島敬志　一九八〇「他界（グス）・祖先（ウヤプディ）・サワリ」渡辺欣雄　植松明石編『与那国の文化――沖縄最西端与那国島における伝統文化と外来文化：周辺諸文化との比較研究』与那国研究会
（ネット資料）
林野庁西表森林生態系保全センターURL:http://www.kyusyu.kokuyurin.go.jp/huresen/huresentop.htm

【注】

（1）本土でも自宅葬の頃の葬儀は親戚や葬式組などと呼ばれる近隣の互助組織によって行われていた。

（2）行燈、提灯などは本来は実用的なものであったと考えられる。

（3）これらの作り物は野道具と呼ばれ、現在では葬儀社によって用意される。

（4）明治の終わりころ、那覇に葬儀会社が創業し、造花の蓮華や造花の花環が葬列に並ぶようになった。他府県人の葬列は華やかであり「大和だび（日本式葬式）」と呼ばれたという。大正初期から首里・那覇に葬儀会社が増えたので、葬儀は次第に日本式に変わっていった［那覇市企画部市史編集室　一九七四　二三六］。

（5）サンをくぐる儀礼は現在でも沖縄本島大宜味村塩屋で行われている。

（6）宮古地方多良間島でも自宅葬では与那国島と同じような作り物が作られている。僧侶が招かれることもほと

んどないという。

(7) 与那国島の死生観や死に関する伝承についてはムヌチの〇氏（祖納出身・比川在住）と主に祖納の年配者に話を伺った。ムヌチとして長い経験を積む〇氏は多くの死者儀礼にかかわってきた。シマの死に関する伝承と死生観については豊富な知識を持っている。

(8) 海で亡くなって死体が見つからない場合には、ムヌチが海でマブイを掬ってきて、墓の口の香炉の裏側に置く。

(9) 一二年おきに行われる一歳から八八歳までの祝いのことである。

(10) 筆者は拙稿（二〇一三）で、葬送を担当する霊的職能者であるムヌチの行動に焦点を当て同島の葬送を報告した。ここで紹介したムヌチの行為はその要約である。

(11) 家族か親戚の中で生まれ年で選ばれた人が後ろを向いて三回叩いてから墓の口を開ける。

(12) 死者の〝しらせ〟とは悪い夢を見た、仏壇の位牌が倒れる、体調が思わしくないなどである。

(13) 僧侶ではない〝死者を送る人々〟が葬儀にかかわる地域は与那国島だけではない。筆者の調査では、沖縄本島ヤンバル地方でも葬儀を行う霊的職能者がいた（る）という。宮古島では集落のカンカカリャーやカンニガイオバアと呼ばれる人々が行った。伊良部島ではムヌスーという霊的職能者に頼んだ。

(14) 話者の年齢から推察して一九三〇年代から戦後にかけての事例である。

(15) 八重山地方黒島では御嶽の管理者であるチジリが中心になって作り物を製作したという。

(16) 位牌には戒名ではなく俗名、つまり本人の名前を書く。戒名のある場合は戒名も裏に書くが、与那国島では戒名は重要視されていないという。

(17) 仲里正明氏は町役場職員、崎原孫吉氏は町会議員、入仲誠三氏は町長経験者である（二〇一二年当時）。

(18) 沖縄一帯では蓮の造花は単にハナと呼ばれる。八重山地方の多くの話者によると、紙をハンカチで覆いながら絞って皺をよらして蓮の花の形を作ったという。

(19) 担当者の話では以前は赤などのイロバナも作ったという。

(20) あの世に豊作を持って行かれ、この世が不作になるおそれがあるので、かならず種子物を炒って芽の出ないようにして持たせるという［赤田　一九八三　六二］。

(21) 実際、行燈という言葉は聞かなかったが、四角い形と、位牌と共に前卓に載せて墓地まで運ばれることから行燈と推察した。

(22) 提灯は「葬儀書式」の燈篭であろう。

(23) トウツルモドキとは鹿児島県（徳之島以南）、沖縄、中国南部、東南アジア等に分布し日当たりのよい林縁にみられる蔓性の植物。葉の先が巻きひげのようになっており他の植物に絡みつく（［林野庁西表森林生態系保全センター　URL］）。丈夫なので与那国島ではでザルや籠を作った。

(24) ウチカビとはあの世で使うお金であり黄色い紙で丸い印が押してある。御願用白紙は半紙のような白い紙を束ねたものである。御願用白紙とウチカビは市販されている。この日は葬式の分と三日目、初七日の分を用

意した。

(25) 一八七五年に八重山に布達された『富川親方八重山島諸締帳』の「葬礼定めの事」には、百姓らは村で四流旗を四つ布で調え、各村所に保管しておき使用すること、生活に困っているものは坊主を呼ばず経巾だけで済ますことなどの定めが記されている［石垣市総務部市史編集室　一九九一　六九～七〇］。四流旗や経巾は琉球国時代からの葬具といえよう。なお、この経巾の習俗は近年まで沖縄一体で広く行われていた。多良間島や与那国島では今でも行われている［古谷野　二〇一二　五五］。

(26) この〝顔を覆う布〟と龕をしばって固定する布、葬列の両脇で引く幕の三点は特にマブイと呼ばれ、「後生への道の加護になる」と考えられていたという。［米城　二〇一〇b　五七七］。

(27) 四流旗に書かれるのは「無常偈」であり、墓地旗に書かれるのは「正信念仏偈」である。

(28) これらの袋は葬儀社に由来する作り物の範疇に入るが、仏語の書かれている点を重視して仏教的な要素を持つ作り物に入れた。

(29) 袋に書かれる文字は禅語に由来する［米城　二〇一〇b　五八〇］。

(30) 葬儀に際して死者の爪や死者の家族の爪を切って持たす習俗は本土でも行われている。

(31) 実際、与那国島では、これらの作り物を「ソウシキヤーのまねごとさー」という人がいる。なお、南国の植物であるクロトンを飾るキバナの風習は本土では見られないが、西表島や宮古地方の葬送でも使われていた。沖縄の葬儀の作り物が本土の葬儀社の模倣であっても沖縄にあった工夫がされていることがわかる。

(32) また、購入した蝙蝠傘や下駄にも金銀の飾りが付けられる。

(33) この香炉がはたしてムヌチ自身の手で作られたのかどうかは定かでないが、ムヌチが中心となって行った墓の口開けの際に作られるのでムヌチの作り物とした。

(34) 植松・大沼は次のように報告している。「ツチノエ、ツチノトに生まれることはよくないとされていて、この日に生まれた子は、カブチ（鍋敷）を子の頭から上まで、七回上下させて通し、七回生まれてきたことにして健康を願い、男女児ともマユ、カマド、ナビというチマナをつけた」[植松・大沼　一九八〇　九六]。

(35) 名嘉真によると沖縄方言で死を表わすのによくつかわれるマースン、マーチャン、マーセという言葉は「何か物を回しなさい、たらい回しに回す」という意味であると述べ、「この言葉には、現生の人はまっすぐ前に向かって進んでいるけれども、死んだ人は回れ右をして後ろに進んで行った。後生の世界が後方にあるという考え方が含まれていると思われる」と記している[名嘉真　一九八九　二二五]という。

(36) 「タチ」は龍、「ムンビ」は結び方であるというが[米城　二〇一〇a　八～九]、筆者は縦結びに由来する名称ではないかと考える。普通の結び方は横結びであり、縦に結ぶことは平素とは異なる。葬儀では平素と逆を行うことが多く、紐の結び方も縦結びにするのであろう。縦結びの方がほどけにくいという実用的な意味があるのかもしれない。

(37) なお、天蓋には虫の形のような金紙が四カ所に貼り付けられているが、この虫については精子だという男性がいた。タチムンビが女性の腹部を模しているといわれていることからの発想であろうか。

(38) 前述の『富川親方八重山島諸締帳』の「葬礼定めの事」は派手に行われるようになった焼香や茶毘（葬儀）の簡素化を命じている［石垣市総務部市史編集室　一九九一　六九］。しかし、焼香や茶毘を派手に行っていたのはごく一部の人々であり、また地域差も大きかったと考えられる。

(39) 波照間村事務所に残された「島庁通達綴り」の「第九四五ノ一号」（明治三七年六月六日受付）には、出征軍人名誉の戦死の葬式では〝同情ノ意ヲ表スル為メ〟、小学校教員または生徒のうち幾分かはなるべく会葬、間切吏員、間切会議員は必ず会葬のこととある［竹富町史編集委員会　二〇〇九　一四〇］。